

大学等シーズ・ニーズ創出強化支援事業
(イノベーション対話促進プログラム)
実施状況報告書

平成26年4月1日
国立大学法人千葉大学

目 次

1	当初計画の概要等	3
	(1) 当初設定した事業の目的	3
	(2) 実施体制	3
2	業務の実施状況	4
	(1) 事業全体の概要	4
	(2) 実施したワークショップの詳細	6
	① 1回目のワークショップについて	6
	② 2回目のワークショップについて	9
	③ 3回目のワークショップについて	12
	④ 4回目のワークショップについて	16
	⑤ 5回目のワークショップについて	18
3	事業実施により得られた知見・課題等	20
	(1) 本事業による一連の取組を通じて得られた知見・課題等	20
	(2) 今後の活動への展望	20
4	その他	21
5	参考資料（プロトタイプ研究）	22

1 当初計画の概要

(1) 当初設定した事業の目的

超少子高齢社会における多世代共生社会の構築をテーマとした。少子高齢社会では労働人口減少による①圧倒的に効率的な社会基盤の構築、高齢者増による医療・介護負担の増加に対して②効率的で満足いく医療・介護体制への改革、さらに医療・介護需要増を抑制する③健康の飛躍的な増進が必要である。つまり、これら3つを満たすイノベーションを目的として講演とワークショップを行った。

大分類1：効率的な社会基盤の構築という課題

人とロボットの共生社会を考える。超少子高齢化社会にあっても、私たちが豊かさを享受していくためには人に代わって生産活動をするロボットが不可欠である。また医療福祉介護、家事、独居高齢者と自在に双方向コミュニケーションするロボットや安全・安心の知能ロボットと人間との身近な共生社会が確実にやってくると思われます。社会生活が根本から変革する近未来型共生社会のあるべき姿（社会インフラ、ライフスタイル、ものづくり、人づくりなどのイノベーションとしての課題は何か）について、イノベーション対話を行った。

大分類2：効率的で満足いく医療・介護体制への改革

ICT技術（Information and Communication Technology）の徹底した活用による革新的医療・介護システムがある。在宅での近未来型遠隔治療や病気では死ぬことのない超高度先端医療の構築は人間の悲願であり、高齢社会において必須のイノベーションをめざした。

大分類3：健康の飛躍的な増進

ウェアラブル検診装置やインテリジェントトイレは構想としてあるが、ベッド就寝中や食事中、排便中に様々なセンサで血圧、血糖値、脈拍や熟睡度、尿糖値、体脂肪、体重、肥満度、尿温度やカロリー計算と咀嚼回数などのデータ取得により健康チェックを行い、毎日が人間ドックのような健康管理であれば健康な長寿社会が到来し、活力に満ちた超少子高齢社会となる。この場合の技術的課題は何かについて、イノベーション対話を行った。

(2) 実施体制

本事業は、齋藤康 学長の事業責任の下、実施した。

- ① 実施責任者：野波健蔵 副学長（産学連携・知的財産機構長）が事業を統括した。
- ② 対話型ワークショップ企画：藤田伸輔 予防医学センター教授が企画委員会を組織し、「超少子高齢社会における多世代共生社会の構築」を牽引するための講演会とワークショップを計5回企画運営した。
- ③ 運営：産学連携・知的財産機構及び学術国際部産学連携課（事務部署）がワークショップの準備・会場設営等を行った。
- ④ 企画委員会：野波、藤田、石田（学術国際部長）、彌富（学術国際部産学連携課）、長谷部（学術国際部産学連携課）、井上（地域医療連携部）、土井（高齢社会医療政策研究部）

2 業務の実施状況

(1) 事業全体の概要

イノベーション対話ツールを用いてワークショップを進めた。毎月1回ワークショップを行った。各回は午前中「超少子高齢社会における多世代共生社会」に関連するテーマの講演とし、学内での連携を促進することを目的に学内の研究者を中心に講演者を選定した。午後は教員・学生・企業従業員・金融従業員・行政によりグループワークを行った。

千葉大学にとって本事業はイノベーションツールをテーマとした初めての試みであったため、担当者の意識すりあわせ、課題の把握のために講義用資料の準備から始めた。文部科学省イノベーション対話ツールの中でブレインストーミング、2×2、親和図、バリュエグラフを選定し、これらの教育マニュアルを作成した。次に行うべきワークショップのボリュームを見積もった結果全5回とし、カリキュラムを作成した。その上でシラバスを作成し、到達目標と評価ポイントを設定した。

2回目のワークショップまでは自己紹介とアイスブレイクを別仕立てにした。しかし企画委員会でこの方式を続けることに異論が出た。即ち多くのメンバーが継続して参加する我々の形式では、毎回自己紹介とアイスブレイクを行うことは冗長であること、討論に十分な時間をかけるべきだということであった。自己紹介では、発想力が豊かで相手の印象に残る自己紹介をトレーニングすべきとの結論に達し、植物にたとえる、工業製品にたとえる、千葉の地名にたとえる、歌にたとえる、とそれぞれテーマを決めて、絵を添えて発表することにした。回を追うに従って自己表現力が向上することを実感できた。

自己紹介1	自己紹介2	自己紹介3	自己紹介4	自己紹介5	自己紹介全体
題名 自己紹介 目的 自分のイメージをわかりやすく相手に伝える 手法 A3の紙1枚に4色以内で自己紹介フリップを作成する プレゼンテーション は1分以内	題名 自己紹介(植物) 目的 自分のイメージを植物にたとえてわかりやすく相手に伝える 手法 A3の紙1枚に4色以内で自己紹介フリップを作成する 植物のスケッチ (写真不可)を描く 植物の特徴と自分の特徴を比較 する プレゼンテーション は1分以内 「〇〇をご存じですか」と植物の紹介 から始める	題名 自己紹介(工業製品) 目的 自分のイメージをわかりやすく相手に伝える 手法 A3の紙1枚に4色以内で自己紹介フリップを作成する 自分のイメージを工業製品にたとえる 工業製品のスケッチ (写真不可)を描く 工業製品の特徴と自分の特徴を比較 する プレゼンテーション は1分以内 「〇〇をご存じですか」と工業製品の紹介 から始める	題名 自己紹介(千葉県の地名) 目的 自分のイメージをわかりやすく相手に伝える 手法 A3の紙1枚に4色以内で自己紹介フリップを作成する 自分のイメージを千葉県の地名にたとえる 千葉県の地名のスケッチ (写真不可)を描く 千葉県の地名の特徴と自分の特徴を比較 する プレゼンテーション は1分以内 「〇〇をご存じですか」と千葉県の地名の紹介 から始める	題名 自己紹介(歌) 目的 自分のイメージをわかりやすく相手に伝える 手法 A3の紙1枚に4色以内で自己紹介フリップを作成する 表現は自由だが、手書き以外は認めない プレゼンテーション は1分以内	目的 自己の特徴を簡潔に表現する。 自分をたどるの に一般的ではないものを使用することで自己の内面を見つめる。 手書きにすること で特徴を抽出して表現する。 5回繰り返すこと で1回目と5回目の表現の違いに気づく。

3回目から実験・プロトタイプ作成を織り込んでいったが、発想の広がりには限界を感じた。その原因を企画会議で検討し、工学分野の場合は課題が比較的はつきりとしているのに対して、社会科学にイノベーションを持ち込む際には多様な側面がかえって発想の広がりを阻害し、思考をフォーカスしにくいのではないかと結論に至った。そこでバリュエグラフの比重を増やし、根源的価値を考え、特に関心が高い部分に思考を限定しオズボーンの質問を適用するようになった。5回目はイノベーション対話ツールをよりいっそう活用することを狙い、研究計画の作成にフォーカスを当てたワークショップとした。多世代共生社会の構築において最も重要で最も困難なことは市民に意識改革を促し、それを行動に結びつけることである。そこで全グループが健康知識や医療問題に関する知識普及と行動変容を課題とした研究を実施することをテーマとしてワークショップを行い、プレゼンテーションを行った。

次に全カリキュラムを示す。

	10月24日 高齢者への愛	11月21日 全ての人への愛	12月19日 全ての人への愛	1月30日 未来への愛	2月20日 研究の促進
	社会 医療看護 健康	社会 医療看護 健康	社会 医療看護 健康	社会 医療看護 健康	社会 医療看護 健康
10:00	全体会	全体会	全体会	全体会	全体会
10:15	趣旨説明	基調講演	高齢者の医療	大武美保子:千葉大学	土井俊祐
10:30	基調講演	野波健蔵:千葉大学	横手:千葉大学		
10:45	五橋金徳:慶応大学	ロボット			井出博生
11:00			坂本:千葉大学	小林正弥:千葉大学	
11:15		長澤成次:千葉大学			藤田伸輔
11:30	高齢社会のイントロ				
11:45	グループ分け				
13:00	オープニング:自己紹介1	オープニング:自己紹介2	オープニング:自己紹介3	オープニング:自己紹介4	オープニング:自己紹介5
13:15	アイスブレイク1	アイスブレイク2	Value Graph	2×2非線形軸	研究申請書イノベーション
13:30	親戚と日本	宿題1発表会	多世代共生社会	多世代共生社会	
13:45	プレゼンテーション1	プレゼンテーション3	社会 医療看護 健康	強制連想法	
14:00	高齢社会 高齢医療 高齢健康	多世代共生社会		多世代共生社会	
14:15					
14:30	2×2&親和図1	2×2&親和図3			
14:45	高齢社会 高齢医療 高齢健康	多世代共生社会			
15:00					
15:15	プレゼンテーション1	2×2の超越	プレゼンテーション4	プレゼンテーション5	プレゼンテーション6
15:30	高齢社会の現状	多世代共生社会	多世代共生社会	多世代共生社会	
15:45					

第2回までは当初の目的にそって3大分類（社会基盤・医療介護体制・健康増進）にグループを分割してグループワークを行った。第3回からは複合的に考える必要があることから分類にこだわらずに進めた。

次に全体会の講演者とテーマ、およびワークショップで生まれた研究を示す。

	第1回		第2回		第3回		
	石橋金徳		野波健蔵	長澤成次	坂本郁夫	横手幸太郎	
所属	慶応義塾大学	所属	千葉大学	所属	千葉大学	所属	千葉大学
演題	「イノベーション対話」について	演題	高齢社会とロボット		医療・介護現場における転倒転落事故対策		高齢者の医療
実施日	H25.10.24		H25.11.21	H25.11.21	H25.12.19		H25.12.19

	第4回		第5回				
	大武美保子		小林正弥	土井俊祐	井出博生	藤田伸輔	
所属	千葉大学	所属	千葉大学	所属	千葉大学	所属	千葉大学
演題	コミュニケーションと共想法		対話的なコミュニケーション医療と多世代共生	超高齢社会と医療需要	医療供給推計	多世代共生社会	
	H26.1.30		H26.1.30	H26.2.20	H26.2.20	H26.2.20	

No.	研究計画名	職名・代表者名	所属（連絡先）
1	イノベーション対話ワークショップで創出された構想に基づく『人と人とのつながりを重視した失語症向け絵カード言語訓練環境の試作』	教授・黒岩 眞吾	融合科学研究科 (kuroiwa@faculty.chiba-u.jp)
2	話題発見と多世代交流を支援するシステムの開発	准教授・大武 美保子	工学研究科 (otake@chiba-u.jp)
3	対話型ワークショップ「超少子高齢化社会における多世代共生社会の構築」新しい、情報発信・多世代コミュニケーションへの取り組み	特任教授・村上 武志	産学連携・知的財産機構 (murakami@faculty.chiba-u.jp)
4	高齢者向けの生活支援ロボットに安心感を付与するための基礎調査—看護師が看護ケアで患者に触れる手に関する影響の検討	教授・正木治恵	看護学研究科 (hmasaki@faculty.chiba-u.jp)

ワークショップの情報は、千葉大学産学連携・知的財産機構のホームページ「文部科学省大学等シーズ・ニーズ創出強化支援事業」 <http://www.ccr.chiba-u.jp/>から発信した。

(1) 実施したワークショップの詳細

① 1回目のワークショップ (H25.10.24) について

ア. ワークショップの概要

全体会の目的：イノベーション対話ツールへの導入

分科会の目的：イノベーション対話ツールの試用

ワークショップの達成目標：イノベーション対話ツールの効果を知る

ワークショップのテーマ：高齢社会とは

ワークショップのグループ設定：7 グループに対して社会基盤・医療介護体制・健康増進の3課題を個別に設定した。

ワークショップの成果：ブレインストーミングを促進するヒントを得た。イノベーションツールとして2×2と親和図がKJ法より優れていることを実感した。

【参加者の状況】

	所属機関・部署等	合計	
		男性	女性
a	自然科学系研究者	10	4
b	人文・社会系研究者	0	0
c	技術系職員	0	0
d	事務系職員	0	0
e	大学等 リサーチ・アドミニストレーター (URA)	9	0
f	産学官連携コーディネーター	5	0
g	学生 (大学院博士課程、修士課程、学部生)	11	0
h	上記a~g以外	0	0
i	不明	0	0
j	研究開発部門	4	0
k	事業企画部門	2	1
l	企業 経営部門	0	0
m	上記j~l以外	8	0
n	不明	0	0
o	TLO	0	0
p	地方公共団体 (公設試験研究機関を除く)	3	1
q	公設試験研究機関	0	0
r	財団法人・第3セクター等	0	0
s	そのほか (a~rのいずれにも該当しないような場合)	0	0
	合計	52	6

第1回							2013.10.24
	時間	所要時間	実際の 終了時刻	実際の 所用時間	内容	担当	
1	13:30 - 13:31	0:01			オープニング	藤田	
2	13:31 - 13:33	0:02	13:35	0:05	自己紹介・チーム名決定	藤田	
3	13:33 - 13:43	0:10			自己紹介・チーム名検討		
4	13:43 - 13:45	0:02	13:52	0:17	チーム名発表 (2程度)	藤田	
5	13:45 - 13:48	0:03	13:57	0:05	アイスブレイク	藤田	
6	13:48 - 14:03	0:15	14:08	0:11	作業		
7	14:03 - 14:05	0:02	14:13	0:05	コメント	藤田	
8	14:05 - 14:10	0:05	14:20	0:07	BS	藤田	
9	14:10 - 14:17	0:07	14:26	0:06	アイデア出し (前半)		
10	14:17 - 14:22	0:05	14:28	0:02	途中確認、コツの説明	藤田	
11	14:22 - 14:29	0:07	14:36	0:08	アイデア出し (後半)		
12	14:29 - 14:32	0:03	14:43	0:07	枚数確認、コメント	藤田	
13	14:32 - 14:42	0:10	14:52	0:09	休憩	藤田	
14	14:42 - 14:47	0:05	15:00	0:08	2×2	藤田	
15	14:47 - 15:17	0:30	15:25	0:25	作業		
16	15:17 - 15:19	0:02			コメント	藤田	
17	15:19 - 15:24	0:05	15:33	0:08	親和図法	藤田	
18	15:24 - 15:49	0:25	15:54	0:21	作業		
19	15:49 - 15:52	0:03	15:55	0:01	コメント	藤田	
20	15:52 - 15:54	0:02			プレゼン	藤田	
21	15:54 - 16:24	0:30	16:31	0:36	発表 (6グループ想定)		
22	16:24 - 16:30	0:06	16:35	0:04	宿題指示、解散	藤田	

イ. ワークショップの検証

全体会ではイノベーションとは何か、集合知の特性、イノベーション対話ツールの狙い、

について慶応大学石橋先生に講演していただいた。全体会はアカデミックリンクセンターの多目的ホール（オープンスペース）を用いたが、少し寒く冬に向かうことを考えると快適とは言えなかったため次回以降は全体会も講義室に移すことにした。

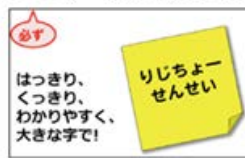
イノベーション対話ツールの導入としてブレインストーミング、2×2、親和図を用いた。ブレインストーミングの開始に当たって4つの注意点を十分に説明した。ブレインストーミングの目標として1分間につき10アイデアを出すことを目標として掲げた。活発なグループ（8-12アイデア/分）と、そうでないグループ（4-6アイデア/分）にはっきりと色分けされた。ブレインストーミングを2回に分け、立ってブレインストーミングすること、声を出すことを再度強調するとどちらのグループも活性化され10-14アイデアと8-10アイデアとなった。活発でないグループの特徴としては、アイデアが出ているのにポストイットに書いて貼ることをためらう、一つのアイデアに関連したアイデアの表出（アイデアに乗っかる）をためらう、あるいはアイデアに乗っかることが主で違うアイデアを出す（アイデアを切る）ことをためらう傾向があった。書くことをためらう人には代筆することが有効な手段であるが、他のメンバーがアイデア表出することの妨げになることも懸念された。このため1介入は1分以内と決めて臨んだ。アイスブレイクが白熱してきたため打ち切りにくく少々延長した。時間の関係でこのグループにさらに介入することはできなかったが、次の2×2のセクションでアイデアを追加しても良いかという質問を受けた。即ちイノベーション創出対話という手法に慣れるのに時間がかかったと思われるが、十分な効果は上げていると感じられた。またブレインストーミングについては、アイデアを出し尽くしてからさらに10分間粘る方法もあるが、2×2あるいは親和図の中で粘りに相当するインサイトを得られることを説明した。

ブレインストーミングのやり方

質より量



大きな声で読み上げる



自発的に盛り上げる



アイデアに乗っかる



ウ. ワークショップのアウトプット等

2×2で軸の設定によってインサイトが変化することを説明したためか、軸にこだわりのなかなかなか決断できない傾向が認められた。最初から成果を上げようとせずすぎないように常識的な軸からアプローチさせ、その後1軸のみアレンジを加えた方が良さだろうと考えられた。実際軸の設定に迷っているチームにはファシリテータが強引に決めてやってみると、その後は自然に軸を変えてみるようになった。アイデアの隙間に注目することは、理屈としては解っても取り組みにくそうであった。その理由の一つは、ブレインストーミングで得た全てのアイデアを読みやすくずらして貼ったために隙間に気づきにくいことであるようだった。ワークショップの設計段階で2×2と親和図は時間を分けて使用することにし

② 2回目のワークショップ (H25.11.21) について

ア. ワークショップの概要

全体会の目的：高齢者が多い社会を支えるヒント

分科会の目的：2×2、親和図、2×2の超越を使いこなす

ワークショップの達成目標：多世代共生社会のイメージをつかみプロトタイプ研究のヒントを得る

ワークショップのテーマ：多世代共生社会

ワークショップの課題設定：社会基盤・医療介護体制・健康増進の3課題をグループ別に設定した。

ワークショップの成果：各グループのプロトタイプ研究方針が提案された。

全体会議では野波健蔵が「高齢社会とロボット」を、長澤成次が「超少子高齢社会における多世代共生社会の構築に向けて社会教育・公民館・生涯学習の視点から考える」を講演した。現在のロボット技術と将来への展望を知り、超少子高齢社会において解決すべき課題のヒントを得た。また公民館における生涯教育と多世代交流について学び、生きがいを持って生きることの重要性を再確認した。

分科会のグループワークでは1回目とほぼ同じメンバーで7グループに編成した。自己紹介では自分を植物に例えると言うことで、とても意外な例えが頻出したが説明されるとわかりやすく自己を表現していた。アイスブレイクでは親戚のいる都道府県を選び、その名産品を紹介することとした。各地にそれぞれ特徴があり、その特徴は自然環境と社会環境と人々の努力によって成り立っていることに思いをはせるように設定した。

【参加者の状況】

	所属機関・部署等	合計	
		男性	女性
a	自然科学系研究者	9	4
b	人文・社会系研究者	0	0
c	技術系職員	0	0
d	事務系職員	0	0
e	大学等	9	0
f	リサーチ・アドミニストレーター (URA)	5	0
g	産学官連携コーディネーター	8	0
h	学生 (大学院博士課程、修士課程、学部生)	0	0
i	上記a～g以外	0	0
j	不明	4	0
k	企業	2	1
l	研究開発部門	0	0
m	事業企画部門	8	0
n	経営部門	0	0
o	上記i～l以外	0	0
p	TLO	0	0
q	地方公共団体 (公設試験研究機関を除く)	3	1
r	公設試験研究機関	0	0
s	財団法人・第3セクター等	0	0
t	その他 (a～rのいずれにも該当しないような場合)	0	0
	合計	48	6

イ. ワークショップの検証

午後のスケジュール

- 13:00～13:15 自己紹介
- 13:15～13:30 アイスブレイク
- 13:30～14:10 ブレインストーミング
- 14:20～15:10 2×2&親和図法
- 15:20～16:00 2×2の超越

・適宜休憩を挟みながら進行します。

自己紹介のやり方

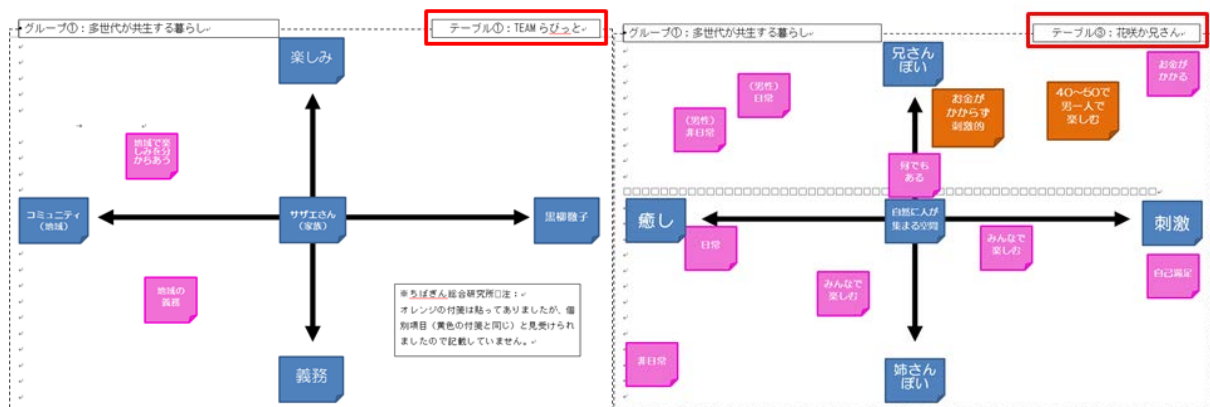
- 1 作成しておいた**自己紹介フリップ**を使ってください。(各自1分以内！)
- 2 最初に**ニックネーム**を。続いて、**自分と植物に共通するイメージ**を紹介。
- 3 最後に「**チーム名**」を決めて、A3の紙に書いてください。
多世代共生社会の救世主にふさわしい名前を！

イノベーション対話ツールはブレインストーミング、2×2&親和図、2×2の超越を扱った。7グループに対して3課題(多世代が共生する暮らし、多世代の共生に必要な技術、多世代で楽しむ健康)の中から一つずつ指定して討論した。ブレインストーミング

は2回目となり最初のセクションから比較的活発にアイデアが出た。1回目と同様に途中で区切って、他人のアイデアに乗っかることを改めて強調したところ、アイデア抽出はさらに促進された。即ちブレインストーミングを繰り返すことの重要性が証明された。1回目の反省から2回目は2×2と親和図とを時間を区切らず実施してみた。前回のグループワークから時間が開いたためか、2×2から始めましょうという課題に対して戸惑うものが多く、再度2×2と親和図の説明を行った。この説明でやり方を思い出したのか、軸の選び方もスムーズで、活発なグループワークが展開された。親和図の前に、あるいは親和図のあとで軸を選び直すグループも現れた。ここでポストイットを用いる方式に対する不満が出た。即ち軸を選び直すと新たなインサイトを得られることは大きなメリットであるが、先に作った2×2に戻りたいとき、比較したいときに難しいと言う問題である。ワークショップ後に良いツールが市販されていないか探したが適当なものではなかった。唯一の解決策は写真を撮ってそれをプロジェクタで投影することと思われたが、多くの短距離焦点型プロジェクタを用意することは出来ず断念した。親和図ではアイデアの隙間を見つけようとするよりも、隙間を全部埋めようとして試行錯誤を繰り返す傾向が見られた。即ち、隙間に飛びついて発想を膨らまそうと言うよりも、何か先例があるはずだという疑心暗鬼の傾向が強いように思われた。この傾向に引きずられて2×2の超越に発想を展開することはさらに困難であった。超越を考えようとして粘るよりも2×2の軸の変更を繰り返したグループもあった。特に苦労していたのは「多世代の共生に必要な技術」を課題としたグループであった。若い人はコンピュータに強く高齢者は苦手だという先入観にとらわれすぎていたので、高齢者に役に立つ、あるいは使いやすいコンピュータというヒントを与えてみたがうまく発想を広げることが出来なかった。慶応大学石橋先生から「役に立つ」といったフォーカスの定まりにくい課題を避けた方が良いというアドバイスをいただいた。

アイデアの広がりを得にくいのは1ヶ月に1回というワークショップ開催頻度が課題に対する考えの継続を難しくしている可能性もあることが指摘された。

ウ. ワークショップのアウトプット等



③ 3回目のワークショップ (H25.12.19) について

ア. ワークショップの概要

全体会の目的：高齢者の医療とその周囲を知る

分科会の目的：バリューグラフの習得と2回目ワークショップの掘り下げ

ワークショップの達成目標：イノベーションの方向性を決定する

ワークショップのテーマ：多世代共生社会

ワークショップのグループ設定：社会基盤・医療介護体制・健康増進

ワークショップの成果：各グループから研究テーマが提案された

パラマウントベッド（千葉大学特任准教）の坂本郁夫から「医療・介護現場における転倒転落事故対策」、横手幸太郎から「高齢者の医療」を講演した。高齢者では転倒転落の予防が重要である。一般的には夜間周囲が薄暗いときに起き上がったときや、寝ていてベッドの端に来てしまったときに転倒転落の危険性が高まる。そこでセンサをベッドサイドに設置し、患者さんの動きをモニターして転倒転落の危険性を通報する。しかし電動ベッドのモータの負荷を検出すれば患者さんがベッドのどのあたりに寝ていて、そこからどのようなスピードでベッドの橋に移動し、起き上がったかを知ることが出来る。モータが発電機としても使えることを利用したセンサであり、イノベーティブな発想であるという発表趣旨であったが、参加者には患者さんの動きを知ることの重要性の方に関心が集中したようであった。また高齢者の医療の特徴についてはほとんどの参加者が始めて耳にする情報であった。これらの発表は高齢者の特性を改めて考えるきっかけとなった。

分科会では2回目のワークショップの成果に対してイノベーションへのヒントを提示し、これを深めることを目的とした。ただし2回目の議論の方向からグループのメンバー構成を一部入れ替えた。自己紹介では工業製品を例にとって自分の特徴を説明することとしたが、それぞれに工夫して事故の調書をわかりやすく伝えていた。アイスブレイクは設けなかった。

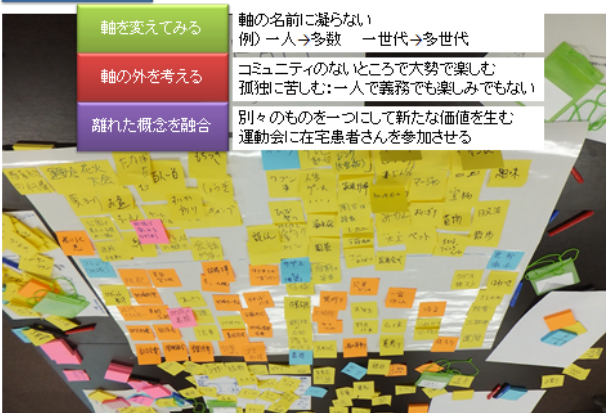
【参加者の状況】

	所属機関・部署等	合計	
		男性	女性
a	自然科学系研究者	6	4
b	人文・社会系研究者	1	0
c	技術系職員	0	0
d	事務系職員	5	4
e	大学等	9	0
f	リサーチ・アドミニストレーター (URA)	4	0
g	産学官連携コーディネーター	10	0
h	学生 (大学院博士課程、修士課程、学部生)	0	0
i	上記a~g以外	0	0
j	不明	0	0
k	研究開発部門	8	0
l	企業	3	1
m	事業企画部門	0	0
n	経営部門	8	0
o	上記j~l以外	0	0
p	不明	0	0
q	TLO	0	0
r	地方公共団体 (公設試験研究機関を除く)	3	0
s	公設試験研究機関	0	0
t	財団法人・第3セクター等	0	0
u	そのほか (a~rのいずれにも該当しないような場合)	0	0
	合計	57	9

イ. ワークショップの検証

グループワークではバリューグラフの紹介を行った。次に「前回の成果から次のステップが見えてくる.....?」をキーワードとして多世代共生社会について検討した。各グループの前回の記録に対してコメントを作成した。これを開設した上でこれまでに学習した2×2、親和図、バリューグラフなどを使ったワークショップを行った。

隙間が見つからない



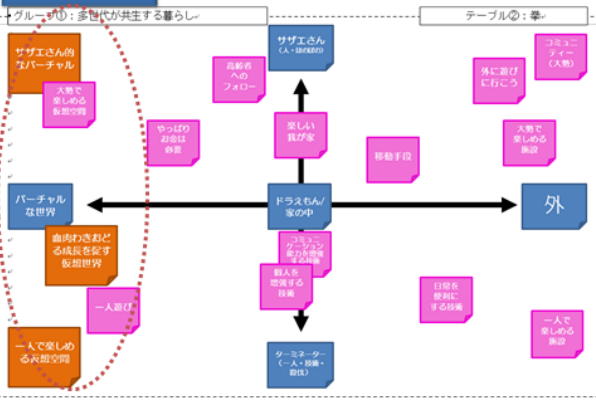
軸を変えてみる
軸の外を考へる
離れた概念を融合

軸の名前に凝らない
例) 一人→多数 一世代→多世代
コミュニティのないところで大勢で楽しむ
孤独に苦しみ: 一人で義務でも楽しみでもない
別々のものを一つにして新たな価値を生む
運動会に在宅患者さんを参加させる

グループ名	TEAMらびっと		
名称	墓参りツアー (仮)		
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・義務的に感じる墓参りを楽しくする ・地域活性化、ルーツを知る、文化の継承 		
概要	<ul style="list-style-type: none"> ・既存のバスツアーを利用=楽しみを加える ・同じ墓地を利用している人を募る ・オーダーメイドのツアーも可 ・人とのつながり 		
費用	調査費		50千円
	移動費		50千円
スケジュール	2013年12月	企画書作成	
	2014年1月	企画書持ち込み、打ち合わせ開始 (1月中旬)	
	↓	順次、試験運行・改善点抽出	
	2014年2月	発表 (20日)	
その他	-		

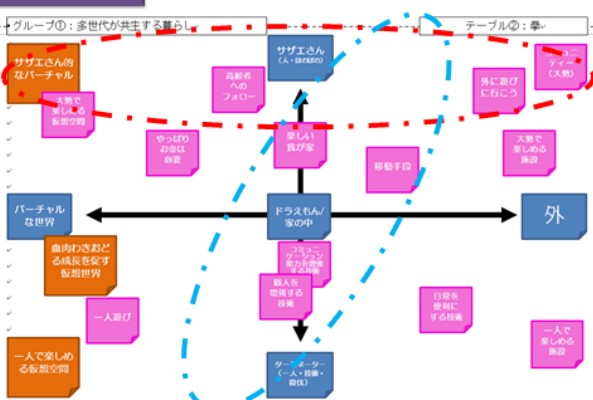
ゲームのような方向性

インベションリアルな世界で起こる
トロコやマトリックスをめぐす?



離れた概念を融合

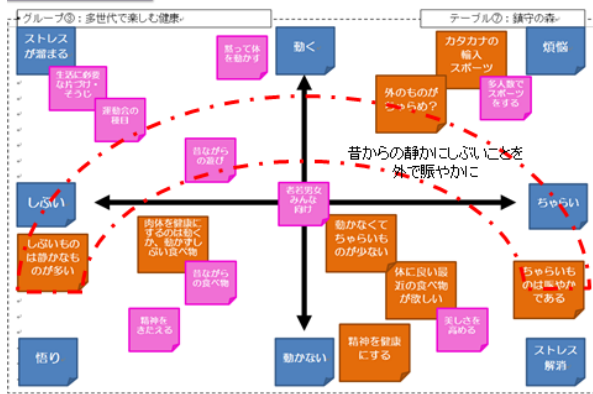
町中でお化け屋敷VRを実施する
他の家族とメンバーを入れ替えて住んでみる



グループ名	拳		
名称	「千葉市のケアを考えるタイムズ」～ケアの総合情報共有ツール～		
ねらい	全ての世代に必要なケアに関する情報を配信と収集により共有し、健康維持や介護予防に役立つ住民参加型新聞。		
概要	<ul style="list-style-type: none"> ◆モデル新聞・記事 (例) <ul style="list-style-type: none"> ・ケアの情報共有でつながりづくり ・ボランティア募集 ・千葉市の医療と福祉に関する情報 ◆スーパー・病院・駅・コンビニ・宅配・回覧板等に添付 ◆新聞と同時に、ホームページでネット配信 (Facebook、LINE、Twitter含む) 		
費用	委員の先生への経費 (@10千円×5人)		50千円
	会議費		100千円
	モデル新聞印刷費 (1万部、B4裏表カラー)		150千円
スケジュール	2014年1月	モデル的に新聞をつくり、いくつかの機関に評価依頼。(1/20頃) その組織づくり (監修の選定: 3~5人) (1/30まで)	
	2014年2月	モデル新聞発行・評価	
その他	記事内容は、将来的にデータベース化。		

離れた概念を融合

しびさと賑やかさの組み合わせ:
高齢者と若者の交流



④ 4回目のワークショップ (H26.1.30) について

ア. ワークショップの概要

全体会の目的：コミュニケーションの手法と意義を認識する

分科会の目的：プロトタイプ研究案を煮詰めて実行計画にする

ワークショップの達成目標：バリューグラフのなかで強制連想法を使う

ワークショップのテーマ：多世代共生社会の実現に必要な研究の推進

ワークショップのグループ設定：社会基盤・医療介護体制・健康増進

ワークショップの成果：2つのプロトタイプ研究が定まった

全体会では大武美保子が「コミュニケーションと共想法」、小林正弥が「対話的なコミュニケーション医療と多世代共生」を講演した。

【参加者の状況】

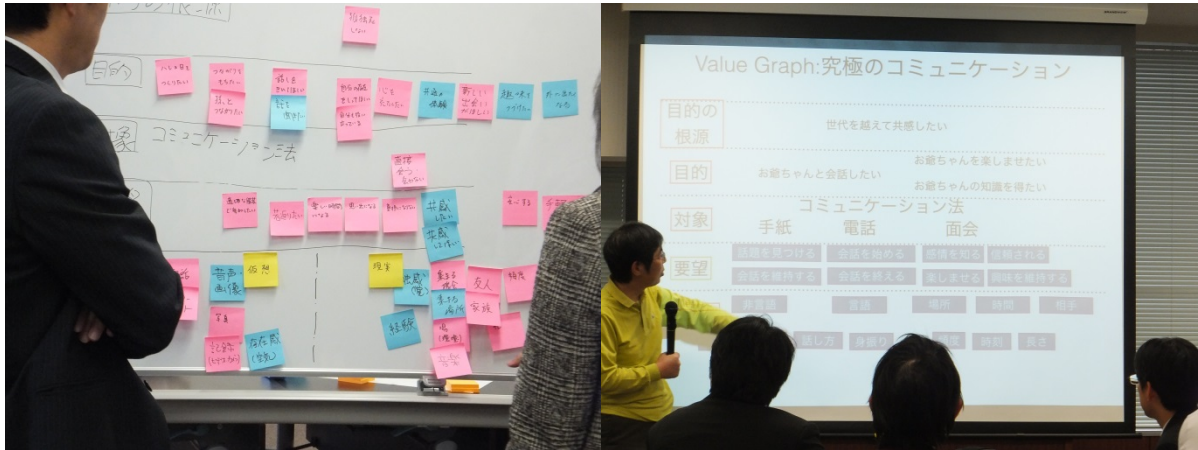
	所属機関・部署等	合計	
		男性	女性
a	自然科学系研究者	6	4
b	人文・社会系研究者	2	0
c	技術系職員	0	0
d	事務系職員	0	0
e	大学等 リサーチ・アドミニストレーター (URA)	9	0
f	産学官連携コーディネーター	4	0
g	学生 (大学院博士課程、修士課程、学部生)	10	0
h	上記a～g以外	0	0
i	不明	0	0
j	企業 研究開発部門	4	0
k	事業企画部門	2	1
l	経営部門	0	0
m	上記j～l以外	8	0
n	不明	0	0
o	TLO	0	0
p	地方公共団体 (公設試験研究機関を除く)	3	1
q	公設試験研究機関	0	0
r	財団法人・第3セクター等	0	0
s	そのほか (a～rのいずれにも該当しないような場合)	0	0
	合計	48	6

イ. ワークショップの検証

グループワークでは第3回までに考えたプロトタイプ研究テーマを具体化することをめざした。社会改革に至るために必要な要素を検討するためバリューグラフを作成し、その中で特に注目すべき要素を選んで強制連想法を使用した。これにより取り組むべき課題を明確にした。

ウ. ワークショップのアウトプット等





⑤ 5回目のワークショップ（H26.2.20）について

ア. ワークショップの概要

全体会の目的：高齢者増加による医療需要予測と供給見込みのギャップを知る

分科会の目的：社会に伝える

ワークショップの達成目標：社会に伝えるプロトタイプ研究計画を完成する

ワークショップのテーマ：社会と考える

ワークショップのグループ設定：グループ設定を再編し、全員で考えた

ワークショップの成果：新聞の発行とアンケートを実施することになった

【参加者の状況】

	所属機関・部署等	合計	
		男性	女性
a	自然科学系研究者	8	4
b	人文・社会系研究者	0	0
c	技術系職員	0	0
d	事務系職員	0	0
e	大学等 リサーチ・アドミニストレーター（URA）	8	0
f	産学官連携コーディネーター	3	0
g	学生（大学院博士課程、修士課程、学部生）	7	0
h	上記a～g以外	0	0
i	不明	0	0
j	研究開発部門	4	0
k	事業企画部門	2	1
l	企業 経営部門	0	0
m	上記j～l以外	8	0
n	不明	0	0
o	TLO	0	0
p	地方公共団体（公設試験研究機関を除く）	3	0
q	公設試験研究機関	0	0
r	財団法人・第3セクター等	0	0
s	そのほか（a～rのいずれにも該当しないような場合）	0	0
	合計	43	5

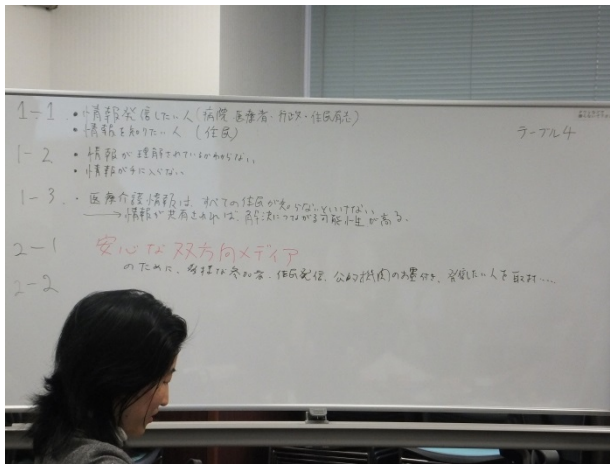
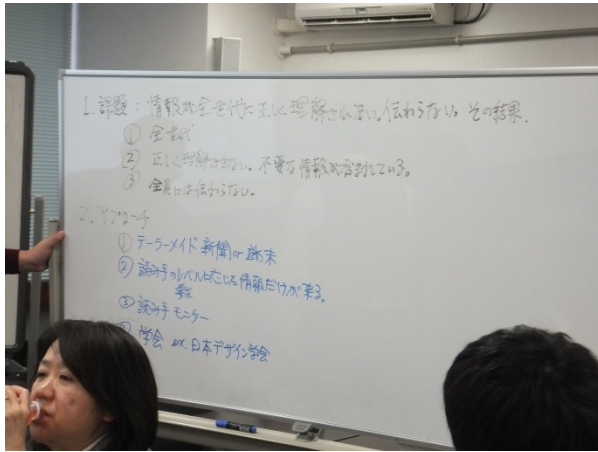
イ. ワークショップの検証

第5回は全てのグループが同じテーマでグループワークを行うこととした。導入として研究計画書の作成においてイノベーション対話ツールの使い方を示した上で、これまでに学習したツールを自由に用いる方式とした。ブレインストーミング、2×2、親和図を特に指示するまでもなく使いこなしていることが確認できた。

ウ. ワークショップのアウトプット等

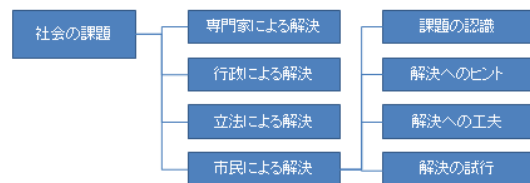
2×2の超越も使いこなしていた。一方期待に反してバリューグラフを用いた班はなかった。物事の本質を見据えたイノベーションを起こすためにはバリューグラフが優れているが、これを使いこなすためにはオントロジーなどの素養が不可欠であり、学習時間数とカリキュラムの再検討が必要であろう。一方2×2、親和図、超越を使いこなせたことは大きな成果であった。全体会では土井俊祐が「超高齢社会と医療需要」、井出博生が「医療供給推計」、藤田伸輔が「多世代共生社会」を講演した。





修正作業に入る前に確認しましょう

- 1 背景
医療や福祉のサービスをそれぞれの制度で対応するには、抜本的な制度変更がない限り行政の出来る事には限りがある
制度だけに頼らず、地域で補い合う力を待つ必要がある
地域で同僚意識を共有し支えあう文化の醸成が求められる
しかし、医療や福祉に関係のない人たちが、これから千葉市の医療を考える場に即座に参加していくことは難しい
- 2 千葉市の医療を考える新聞の目的
多世代の市民が交際できるためのツールとしての「参加型の新聞」



市民へのアプローチ

- 市民とは誰か？

	特徴	情報伝達法
小学生		
中学生		
16-30	通常のアプローチ	
30-50		
50-64	↓	
65-74		イノベのアプローチ
75-		

研究計画書を書こう

1. 解決しようとする課題
 1. 誰が抱える課題か
 2. どのように困っているか
 3. 社会としての課題の大きさ
2. 解決へのアプローチ
 1. 試行したいアプローチ
 2. アプローチがなぜ有効と考えるのか
 3. 有効性をどのように測定するのか
 4. 研究成果をどこに発表するのか
3. アプローチの発展性
 1. 同じ分野での発展性
 2. 他の分野への応用性
4. 予算
 1. 必要な人材
 2. 必要な物資
 3. 必要な時期・期間

3 事業実施により得られた知見・課題等

(1) 本事業による一連の取組を通じて得られた知見・課題等

【直接的効果】

研究計画の作成にイノベーション対話ツールが有用であることを確認できた。千葉大学ではピア・レビューによって研究計画書のブラッシュアップを行ってきたが、より早期の構想段階からの支援としてイノベーション対話ツールが有効であることを実感できた。

直接的利益が明確ではない我々の事業を企業・金融・行政を交えて遂行できたことは、今後の交流について大きな自信となった。

【間接的効果】

事業参加者と密接に連絡を取るようになり、新たな研究への布石を打てた。千葉大学では学内の研究を調査し、相互活用・交流促進を進めている所である。この用や調査結果をどのように活用するかを模索していた所であるが、ワークショップの開催により連携を促進できることが判明した。さらに3月12日のイノベーション対話シンポジウムで他大学の取り組みを知れたことはとても有意義であった。連携する企業の選別、連携の進め方、学生の巻き込み方などどれも大変参考になった。またこのシンポジウムで発表された、対話ツールを通常の会議・打ち合わせで使用して議事録を作成するというアイデアは大変参考となった。

【課題】

千葉大学の課題は以下のように考える。

1. 学生への教育
2. 教員への教育
3. 企業との交流促進

イノベーション対話ツールを学生教育に取り入れ、使いこなせるようにすることが重要と考える。本事業について学内で学生に向けて広報したが、自主的に応募した学生はなく、教員に勧められての参加であった。自主的に多くの学生が参加し、使いこなせるようになることで、イノベーション能力というよりも対話能力の向上、交渉能力の向上が期待できる。即ち今後の我が国を支える人材として非常に重要な能力の開発に役立つと考えるので、これを多くの学生に広めることが重要である。平成26年度はオープンセミナーを繰り返し、その後普遍教育プログラムとしていきたい。

イノベーションについての教育を受けた教員は少数で有り、教育方法の存在自体も知らないことが多いと考える。このため教員向けのセミナーが是非必要だと考えるが、積極的に受講しようとする教員もそれほど多くないと推測する。そこで教員に関心の高い研究計画支援として取り組むべきだと考える。

企業との連携促進については3月12日のシンポジウムで大きなヒントをいただいた。我々はこれまで必要に応じて連携を構築するスタイルであったが、岩手大学や山形大学のように定期的な交流を心がけるべきだと考えた。普段からの交流を随時形に変えていける有機的な関係構築を目指したい。

(2) 今後の活動への展望

課題として述べたことを順次実現していきたい。

4 その他

イノベーション対話ツールは良く工夫されているが、実際の応用例集、あるいは主催者ガイドブックが必要だと感じた。我々が挑戦した社会科学分野にも非常に有用であると実感できたが、活用するには様々な工夫が必要であろう。我々の工夫は全て公開したいので、今後イノベーション対話ツールを用いる教育者のためのセミナーや学会が開催されることを望む。なお我々が用いた資料は以下で公開中である。

<http://renk-chibap.jimdo.com/イノベーション対話創出プログラム/>

<http://www.ccr.chiba-u.jp/>

教育の観点からはイノベーション対話ツールは出来るだけ早い段階で取り組むべきだと考える。我が国ではブレインストーミングから KJ 法を用いる手法が普及している。KJ 法は考えをまとめるには良い手法であるが、枠を越えてイノベーションをもたらすにはあまり適していない。個々の研究者・開発者がそれぞれ創意工夫を凝らすことによってガラパゴス化した中からよりよい物を選び取る、という競争原理はこれまで大きな成果を上げてきた。しかし本質を見据えた研究・開発によって根底からひっくり返されるという経験を多くの者が味わってきたのも事実である。個々の研究成果は決して無駄になるわけではないが、国際競争に勝つためにはより本質に迫る努力が必須である。そういう意味でバリューグラフを出来るだけ早い段階で習得するようにすべきと考える。即ちブレインストーミングについては小学校低学年から、2×2および親和図については小学校高学年から、バリューグラフについては中学校から導入すべきであろう。例えば戦争について、バリューグラフを作成すると、社会制度、科学技術、医療、復興などを有機的に考える力が養われ、歴史への興味が全く違ったものになるであろう。あるいは鎖国という政策が科学、文化、思想にどのような影響を与えたか理解が深まるであろう。またイノベーション対話ツールを使いながら、変わった意見を持つ人のおもしろさ、あえて視点を変えることに有用性を学ぶことが出来ると考える。ぜひ教育改革を御願いたい。

【参考資料】

対話型ワークショップ・グループ研究計画（プロトタイプ型研究）

1. イノベーション対話ワークショップで創出された構想に基づく『人と人とのつながりを重視した失語症向け絵カード言語訓練環境の試作』
2. 話題発見と多世代交流を支援するシステムの開発
3. 高齢者向けの生活支援ロボットに安心感を付与するための基礎調査－看護師が看護ケアで患者に触れる手に関する影響の検討
4. 対話型ワークショップ「超少子高齢化社会における多世代共生社会の構築」新しい、情報発信・多世代コミュニケーションへの取り組み

研究成果報告書

1. 研究（事業）計画名

『人と人とのつながりを重視した失語症向け絵カード言語訓練環境の試作』

2. 研究（事業）計画の内容

我々は、(1)誰もが社会や他者とのつながりを求めていること（互いの写真を見せあい、語り合うことで認知症予防につながることも紹介された）、(2)これに対し、高齢者は肉体的及び精神的な問題でつながりを形成することが困難な場合があること、(3)若者もつながりを求め、誰かの役に立ちたいと思っていること、(4)ゲーム的な要素がモチベーションにつながることに注目し、ITによりこれらを具現化する事を試みた。人と人とのつながりがもたらす機能を失語症者向けの言語訓練装置に導入し、インターネット上で失語症者を中心とする新しいソーシャルネットワークの実現を目指した。そして試験的なシステムの開発を行い、評価及び問題点の洗い出しを行った。

3. 研究（事業実施）状況

現在タブレット端末上で実現している絵カードを用いた言語訓練装置に、『独自絵カード登録機能』及び『ネットワーク連携機能』の導入を試みた。また装置と連携機能を持った『ソーシャルネットワークサーバ』の試作を行い問題点の整理を行った。

4. 研究（事業）結果

『独自絵カード登録機能』として、(1)失語症者やその支援者が、装置に搭載されているカメラを利用して独自の絵カードを登録できる機能、(2)上述の写真を訓練カードとして利用するためのデータとして、正解の音声合成用文字列、画面に提示する文字列、ふりがな（語頭音、モーラ数計算用）、カテゴリー、及び音声認識結果との比較用文字列（複数登録可能）を入力できる機能（図1）、(3)絵カードをグループ化し管理する機能（図2）を試作した。これらの機能により、失語症者の普段利用しているお店や、友人の顔、食事等を絵カードとして利用できるようになり、言語訓練だけでなく、他者との会話においても有効に利用できそうであるとの意見を言語聴覚士や失語症者本人から得ることができた。これら試作した機能はほぼ実用レベルに達しており、現在実施しているフィールドテストの中で評価を進めて行く予定である。

『ネットワーク連携機能』及び『ソーシャルネットワークサーバ』ではソフトウェアの機能及び回線速度等に問題はなかったが、グループの管理や公開範囲の設定等、運用における人的・社会的な問題を解決する必要性が判明した。またサーバと端末が非同期で動作するため、退会時の写真の削除など個人情報保護において、かなり大規模な開発が必要となることが判明した。このため、既存のソーシャルネットワークを利用することも含め再検討が必要となった。なお、「すべての人に公開して良い」とする絵カードについては、これらの問題がないこともあり、今回試作したシステムを活用できる予定である。これにより、絵カードとして発売されていない語の絵カードをイラストレータのボランティアが作成したり、観光地の近所に住んでいるボランティアが写真を提供する等の、人と人との「つながりを支援する」ためのネットワークは実現できる見通しである。



図1 独自絵カード登録画面



図2 独自絵カード管理画面

研究成果報告書

1. 研究（事業）計画名

話題発見と多世代交流を支援するシステムの開発

2. 研究（事業）計画の内容

若者と高齢者をつなぐ多世代交流により、両者における社会的交流の問題を解決するシステムを開発した。コミュニケーションのきっかけとなる、話題探しを日頃から意識するかどうかには、個人差がある。そこで多世代交流の前提となる話題発見を支援するシステムを併せて開発した。

<ワークショップとの関係>

本研究は、ワークショップにおいて実施した、2×2とValue Graphを用いた議論を通じて発想した。コミュニケーションの形式とソーシャルメディアを、同期と非同期、定期と不定期の2軸で分類すると、同期と定期に分類されるソーシャルメディアがないことに気づいた（図1）。また、多世代共生社会という目的を達成するには、他者につながる開かれた自己確立の支援が有効であり、そのためには、話題発見支援と多世代交流支援が必要であると、Value Graphにより記述できる（図2）。

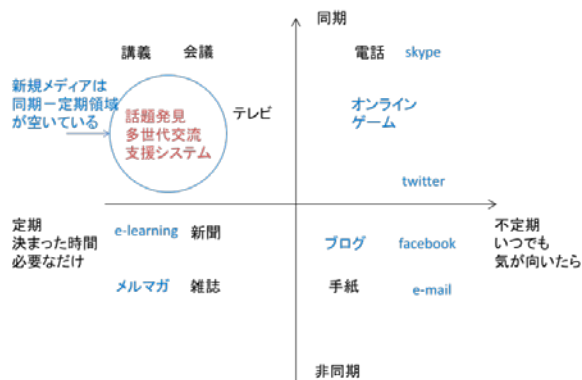


図1) 話題発見と多世代交流の支援システム

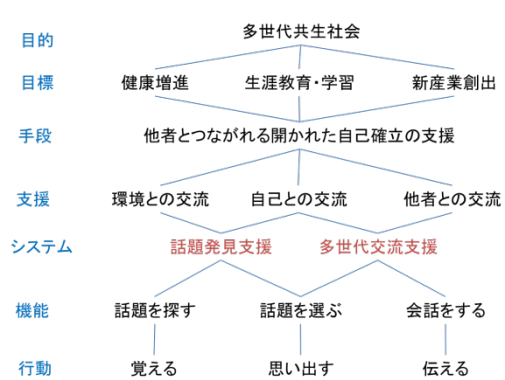


図2) Value Graphによる図解

3. 研究（事業実施）状況

以下の二つの機能を有するシステムを開発した（システム仕様書参照）。

- 1) 最近のできごとを題材に画像と話題を用意し話題発見を支援する
- 2) 高齢者と若者が、画像と話題を活用し、多世代交流を支援する

4. 研究（事業）結果

<得られた成果>

健常高齢者、大学生各5名を対象に、インタフェースの使いやすさと交流のしやすさに関するユーザ評価を行った。健常高齢者はタブレット端末の利用経験がなかったが容易に使いこなせた。大学生も楽しみ、交流の経験がなくてもスムーズに交流できた。

<当初の予想との比較>

ソーシャルメディアが数多く提案される中で、時間やメディアにあえて強い拘束をかけ、定期的、同期的コミュニケーションを支援することで密度の濃いコミュニケーションが実現できた。ソーシャルメディア自体を目新しく感じる高齢者にとってだけでなく、若者にとっても新鮮で、面白く感じられた。

<今後の発展の可能性>

今後は認知機能訓練を切実に必要とする軽度認知障害高齢者を対象に利用評価を行い、本システムによる介入が認知機能と生活の質に与える影響を検証する。また、一人暮らしの軽度認知症高齢者を認知症サポーターが支援することで、本システムの利用範囲を広げる手順を確立する計画である。

研究成果報告書

1. 研究（事業）計画名

高齢者向けの生活支援ロボットに安心感を付与するための基礎調査
－看護師が看護ケアで患者に触れる手に関する影響の検討－

2. 研究（事業）計画の内容

対話型ワークショップ「超少子高齢社会における多世代共生社会の構築」に参加し、社会的課題に対して技術的側面から如何なる対応が可能かについてアイデアを出しあう中で、本研究の着想を得た。今後、需要が拡大する高齢者向けの生活支援ロボットに精神的安定につながる安心感を付与できるように、高齢患者の求める動作として手の触れ方について調査することとした。

3. 研究（事業実施）状況

- ・調査対象施設：高齢患者が多く入院している総合病院
- ・研究対象者：対象施設の入院患者のうち、病状が安定しており会話による意思疎通が十分可能と看護師管理者が判断し、協力の同意が得られた高齢入院患者 14名。
- ・調査方法：対象者の都合の良い場所で、10～20分の半構造的インタビューを行った。対象者の希望により家族も同伴で行い、許可を得てから会話内容を記録した。録音した内容は逐語録を作成し、得られたデータ全てを記述してから質的に分析した。

4. 研究（事業）結果

調査対象者は64歳～89歳、男性6名、女性8名の入院患者であった。対象者の疾患は、脳血管疾患の術後、整形外科疾患の術後、その他であり、入院期間中に生活支援が集中的に必要な期間を経験した方であった。対象者のうち6名は、人に介助などを依頼することを望まないとはっきり表現した。また、家族には頼めなくても看護師には頼めるなど、家族に遠慮する人と、看護師に遠慮する人の理由には違いがあるものの、人に頼みにくい現状が語られた。

対象者は、「動けない時」「手が届かない所」の支援を最も必要としており、具体的には「トイレの介助」が一番欲しい支援であった。また、触れる手で安心感を得られる条件には、「信頼できる関係が前提にある」「まず声をかける」「直ぐに対応してくれる」があり、手で介助したり支える時には、「合図して行き先を導く」「座る場所を導く」など、目的や行き先を明確に示すと安心感につながるということが明らかとなった。また、触れる手の評価としては、「触れられた時の言葉遣いで印象が変わる」「手は、柔らかいから気持ちが良い」「男性看護師の手は硬い」「温かみがあると気持ちが良い、冷たい手で触られても気分は良くない」「触りながら痛いかどうか聞いてくれると安心する」「ゆっくり触られた方が良い」などあげられ、安心感につながる手つきや手の機能について、今後の分析により要素が明らかにできると考える。

本調査は、看護師の手の評価という、対象者が考えたことのない質問であったため、高齢者からのデータ収集は想定よりも難しかった。そこで、予定より多くの対象者にインタビューを行い、データを得た。また、動作や生活支援が必要であっても人に身体に触れられることが嫌な人や、遠慮している人の多さから、自分の意思で自由に動かせるロボットによるセルフケア支援の可能性も明らかとなり、今後の発展が望まれる。

研究成果報告書

1. 研究（事業）計画名

対話型ワークショップ「超少子高齢化社会における多世代共生社会の構築」
新しい、情報発信・多世代コミュニケーションへの取り組み

2. 研究（事業）計画の内容

「千葉市の医療を考えるワークショップ」において、医療・福祉に関して、地域・世代・当事者の状況により様々な問題を抱えていて、一定の必要な情報を周知させる必要性を感じた。具体的には、本来、医療・福祉の情報は、すべての市民が知っておくべきものであることであり、また情報が共有されれば、医療・福祉の抱える問題が解決につながる可能性が高まること、そして医療・福祉における課題として、情報を発信したい側（病院・医療従事者・行政・市民有志）は一般市民に情報が理解されているかどうか分からない、一方で情報を知りたい側（一般市民）は情報が手に入らない、また一般市民が情報を必要とする時には、既に困った状況になっていることが多いことがあげられた。

その対応として、医療等の必要な情報の市民への情報伝達をより確実にを行うこと、と同時に、市民からの意見・考えをどのように吸い上げることの重要性が指摘された。

これらについて検証、評価し、その結果をフィードバックし、今後の千葉市の医療と福祉を限られたパイの中で受ける市民のために役立てるため、正確な情報を伝えられるようにする必要がある。

そのため、公的な監修のもと、情報と対話的な新聞の配布（インターネット世代のために新聞を facebook 等でも配信）が有用という予測の基に、初期調査を実施する。調査の結果、有用であるなら、アンケート結果の市民の必要度のニーズの高い情報を今後も継続し発行をする。

3. 研究（事業実施）状況

(1) 研究の目的

医療・福祉にかかわる情報環境の状況と市民参加型のメディアの可能性を検討することを目的として、ワークショップにおいてアプローチの方法論として検討された「安心な双方向メディアとしての『千葉市の医療を考える新聞』」を発行し、同時に市民参加型の新聞に対するアンケートを実施した。

(2) 調査の概要

- ①調査対象：千葉市内の3医療機関における来院者
- ②調査方法：各病院の受付フロアにて「千葉市の医療を考える新聞」とアンケートおよび返信用封筒を手渡しし、各病院に設置した回収箱にて回収
- ③調査時期：平成26年3月
- ④調査項目：
 - ・基本属性：性別、年齢、居住地区
 - ・千葉市の医療を考える新聞の評価：わかりやすさ、読むのにかかった時間、関心を持った記事、感想、媒体の意向等
 - ・医療等の情報源について：情報入手方法、情報源に対する希望

(3) 研究成果の発表方法

- ・千葉大学医学部附属病院 地域連携室
- ・千葉市病院局、医療福祉系の学会への発表を検討

4. 研究（事業）結果

(1) 得られた成果

1) 「千葉市の医療を考える新聞」の内容についての評価

「千葉市の医療を考える新聞」の記事のわかりやすさは7割以上が「わかりやすい」と回答。興味を持った記事としては、「医師の体験談」(52.4%)、「住民・患者の体験談」(47.6%)等が多くなっている。紙の頁に対する感想としては、6割近くが「読みやすい」と回答しており、内容については全般的に高評価が得られた。

カテゴリ	件数	(全体)%
どれもわかりやすい	4	9.5
わかりやすい	28	66.7
すこしわかりにくい	5	11.9
わかりにくい	4	9.5
無回答	1	2.4
N (%ベース)	42	100

カテゴリ	件数	(全体)%
市内の健康・医療についての取組み事例	12	28.6
医療・介護の言葉の解説	3	7.1
医師の体験談	22	52.4
住民・患者の体験談	20	47.6
医療関係の市民参加可能行事予定	3	7.1
無回答	2	4.8
N (%ベース)	42	100

カテゴリ	件数	(全体)%
とても読みやすい	4	9.5
読みやすい	21	50.0
すこし読みにくい	7	16.7
読みにくい	7	16.7
無回答	3	7.1
N (%ベース)	42	100

「千葉市の医療を考える新聞」に対してどのような記事を期待するか(自由記載)についてみると、患者としての体験や最新の医療について、認知症介護の体験談等の体験談をはじめとする医療・介護・健康を身近に感じ、かつ行動に移せるような記事等があげられた。

1 患者の声を取り上げて
2 身近な病気の解決
3 認知症介護の体験
4 医療とこれからの病院の役割を紹介してもらいたい
5 もう少し「字」を大きくしていただけたら、ありがたいと思います。
6 読者が医療・介護・健康を身近に感じ、かつ行動に移せるような記事
7 老人介護
8 患者の体験談と取り組んで頑張っている方(前向きに)
9 継続することに意味があります。頑張ってください。
10 病気になるための生活のしかた
11 国民健康保険の保険料や医療費の他地区との比較も知りたい
12 医療、福祉に従事される方たちの生の声、現場での葛藤
13 新聞を読むのは、どの年齢層なのか、対象が誰なのか、カタカナ語が多くわかりにくいです。
14 もう少し一つの記事が短いと読みやすい
15 (1)病診連携を分かり易く解説して欲しい。 (2)上手な病身のかかり方の解説。
16 まず、読みやすい字の大きさ。(字が小さく分が長いので読みにくい)介護体験等は解りやすく、内容はとても良かったです。
記事の内容は解りますが、読みにくいです。字が小さい。文章がつまりすぎて、読みにくい。記事…
17 (1)元気な年寄りになる方法 (2)正しい薬の飲み方 (3)ホスピスについて
18 最新の医療方法について
19 今の最先端の医療を知れるような内容
20 専門的な事を知りたいので新聞をみて、どうのこうの言う話ではないと思う。命に時間がないので、心情も色々あるから…
21 医療相談のコーナーとか

また、「千葉市の医療を考える新聞」の内容を伝えるにはどのような媒体がよいか(自由記載)については、テレビ、インターネットがあげられる一方で、インターネットについては、高齢者にとっては難しい、わざわざ検索して読むかどうか疑問といった記載もあった。

Q5「千葉市の医療を考える新聞」を届けるための方法	
1	病院に置いて良い
2	FM
3	テレビ(例)千葉TV
4	新聞で字を大きく文章を短くすると見やすい
5	あらゆる世代に対応する為には、すべての手段が必要ですが、人は自分がそういう環境におかれた時、はじめて気づくことが多いと思います。(その情報が欲しい人が見る)なので、病院や相談窓口、医療の講演会などピンポイントでお届けしても良いのではないのでしょうか。
6	自由な時間に読むことが可能な紙媒体。インターネットはわざわざ検索して読むのかは疑問。
7	インターネットでいつでも情報がわかると良い
8	今回の創刊号のような方法でよいと思うが内容が詰め込みすぎ。文字も小さく読みづらい
9	若い人にはインターネットでも良いが年配の方には
10	インターネット
11	テレビ
12	インターネットとの併用
13	テレビが良いと思います。小さい子から大人まで見ますから
14	方法はどのような方法でも良いが、耳で視聴できればありがたいと思う
15	「行政だより」で発刊を紹介、行政を通じ(又は社協)、地域(自治会等)へ配布
16	すべてに
17	個人宅へ宅配してもらいたい
18	回覧板、市政だより
19	メール
20	地域新聞等に載せて頂いたらどうでしょうか。
21	町内会の回覧。公民館に置く。
22	興味のない方、全くこのような新聞の存在を知らない方の目にも届くように、月1回でも週1回でもよいので、一般新聞(朝日、読売など)の京葉版に一部コーナーを設け連載する。
23	インターネット
24	インターネット
25	病院などの待合室に冊子があると手に取って見ると思う。

2) 千葉市における医療等の情報源について

医療等の情報が必要なときに調べる方法をみると、「インターネット」(59.5%)、「友人・知人」(52.4%)が多い一方、「地域の情報誌」は21.4%、「新聞」は4.8%と低い。また、その情報が十分かについては、「不足している」が28.6%、「やや不足」(45.2%)とあわせると全体の半分以上が不足していると思っている。

カテゴリ	件数	(全体)%
病院・診療所	16	38.1
あんしんケアセンター	2	4.8
市役所	3	7.1
インターネット	25	59.5
地域の情報誌	9	21.4
新聞	2	4.8
友人・知人	22	52.4
家族	7	16.7
その他	1	2.4
無回答	2	4.8
N (%ベース)	42	100

カテゴリ	件数	(全体)%
十分である	8	19.0
やや不足している	19	45.2
不足している	12	28.6
無回答	3	7.1
N (%ベース)	42	100

Q6どのような情報源の充実を求めるか	
1	医療情報が欲しい
2	どこでどの様な治療が受けられるか
3	各種検査
4	何科を受診すれば良いのかわからない時に教えて欲しい
5	病気についての詳しい情報
6	地域ごとの医療機関の一覧表のようなもの
7	その地域の取組方などの紹介があればよい
8	サーチエンジン
9	病院の得意不得意のアピール
10	いつでも、どこでも(駅、病院等)すぐ情報がわかればよいと思います
11	どこに、どの病気の専門医がいるか
12	医療テーマ別に的をしぼって、病院、区役所、コンビニ等においてほしい。
13	今、この時に受診可能な診療所・病院の情報
14	住んでいる地域で流行っている病気(インフルエンザ、ノロなど)の様子。
15	自分は検診のお知らせとか。でも親の世代を考えると、どのようなものを情報源としていいのかわからない。